

AVC-Intra ならではのパフォーマンスを發揮 ノントラブルで画質面も大きな評価

映画

「大決戦！超ウルトラ8兄弟」

撮影監督：高橋創氏

11

2008年秋に大ヒット公開し、2009年1月23日からDVD・BD発売(バンダイビジュアル)する映画「大決戦！超ウルトラ8兄弟」は、メモリーカード・カメラレコーダー“P2 cam”「AJ-HPX3000G」を中心に撮影され、P2HD／AVC-Intraによる制作・編集ワークフローを採用している。

映画「大決戦！超ウルトラ8兄弟」は、開港150周年を迎える横浜を舞台に歴代の8大ウルトラマンが一堂に会し、襲来した大怪獣軍団との決戦を一大スケールで描いた作品。撮影は、本編については全編にわたり「AJ-HPX3000G」を使用するとともに、ミニチュア撮影などの特撮部分はVARICAM「AJ-HDC27H」＋ビデオディスクレコーダー(計測技術研究所)による収録が行われ、完全テープレスのワークフローを構築した。

AJ-HPX3000Gによる本編撮影は1080/24pで収録、メモリーカード・ポータブルレコーダー／プレーヤー“P2 mobile”「AJ-HPM100」を通して撮影現場でプレビューを実施するとともに、1ヶ月以上にわたった撮影期間の全日、撮影終了後に撮影素材を編集拠点(ビジョンユニバース)に搬入した。Final Cut Proによるオフライン／オンライン編集を行い、合成作業はInfernoで実施。上映用フィルムはIMAGICAのレーザーキネコで作成した。

VFXスーパーバイザーを務めた斎藤隆明氏は、「同シリーズは最終的にフィルム上映する映画作品で、これまで35mmフィルムで撮影してきましたが、今回初めてHD撮影を採用しました。HD作品でありながら、P2を使用することでポストプロダクションにおける完全テープレス作業が実現できました。今回、AVC-Intraのスペックを最大限に活かした効率的なフローを構築できたと考えています」と話す。

撮影監督を務めた高橋創氏(フリー)

○撮影は全く違和感なく臨むことができました。撮影現場ではAJ-HPM100を通してプレビューを行いましたが、撮影日の異なるシーンのつながりをその場で確認できることや、特撮カットの合成を想定した本編撮



撮影風景

ポスターとテレビCM

© 2008 「大決戦！超ウルトラ8兄弟」製作委員会

12

影の確認などを、マスタークオリティで行える点は非常に大きいと思います。これまで画質の悪いビジコンテープを確認しながら、撮影のアングル等を決定していました。合成作業やシカケの多い「ウルトラマン」のような撮影では、現場においてマスタークオリティで確認できることは正に画期的だと思いました。

○ P2 カードは 16GB × 10枚をローテーションで使用しましたが、1日分の撮影データは 32GB 容量で概ね足りていました。データの保存や移設、変換などについても全くのノントラブル。当初はデータで大丈夫なのか？と危惧する人もいたようですが、最終的には P2 ならではのレスポンスの良さなど、便利さだけが際立った結果が得られました。

○撮影現場ではバックアップ用として AG-DVX100 を同時に回しましたが、その素材をビジコン用として活用し、非常に便利でした。これまで撮影素材をダウンコンバートした膨大な VHS テープを衣装ケースに収納して現場に持ち込んでいたため、確認するカットを探し出す作業は「○月○日のこのロールのどの辺り」といった見当をつけながら行っていました。データであれば、撮影の内容は一目瞭然であり、整理も簡単です。

○ AJ-HPX3000G は特に画質面においても、非常に高い評価が得られています。フィルムのルックを出しながら、HD ならではのパフォーマンスの良さがあります。空気感を出すためにシネレンズを使用したほか、本編はフィルターワークでビデオ特有の深度をなるべく浅くし、一方の特撮ではできるだけミニチュアの手前から奥までピントが合うようにしています。複数のデジタルムービーカメラがリリースされている現状で、デジタルネイティブでもある VARICAM の今後の動向にも非常に期待しています。

